

江戸東京博物館友の会会報

目次

平成 18 年度定期総会に参加しよう ……………	1	見学会『江戸四宿を歩く 板橋宿』……………	6
創立 5 周年記念 館長特別講演会開催 ……………	1	えど友サークルだより ……………	7
館長特別講演要録『江戸幕政の展開と紀州閩の形成』…	2	まんが『源内さんの江戸博さんぽ その 10』……………	7
友の会セミナー『日記にみる御家人子弟の勉強生活』…	3	えど友プラザ『一之橋通りを下る(2)』/『多摩について』…	8
友の会セミナー『寺子屋教育と現代』……………	4	『東京の地名由来辞典』/ 会議・会合日誌……………	9
特別内覧会『江戸の学び—教育爆発の時代—』展 ……	5	江戸博界限⑨【史跡めぐり】と【しゃも料理・かど家】…	10
江戸博クリップ『都心のオアシス』……………	5	催事案内 / 会員優待のお知らせ……………	11 ~ 12

平成 18 年度 定期総会に参加しよう

5 月 26 日(金)午後 1 時 30 分開催 ～小澤教授の記念講演を予定～

江戸東京博物館友の会も第 6 年度を迎え、定期総会開催の運びとなりましたのでご案内いたします。

会員皆さまのご協力をいただき友の会活動も年々充実し、会員数も 1000 名を数えることができ嬉しいかぎりです。

定期総会は会員が一堂に会し、1 年間の友の会活動を振り返るとともに、新しい年度へのきたないご意見ならびにご要望をお寄せいただく機会です。

5 月中頃までにはお手元へお届けす

る議案書をお読みいただき、一人でも多くの会員の皆さまがご出席されることを願っております。

開催要領は次のとおりです。

■平成 18 年度 友の会定期総会

日時：5 月 26 日(金)

午後 1 時 30 分

会場：江戸東京博物館・1 階ホール

●主な議案

- ・平成 17 年度 事業報告(事業部会、広報部会、総務部会)
- ・平成 17 年度 会計報告・監査報告

・平成 18 年度 事業計画案(事業部会、広報部会、総務部会)

・平成 18 年度 事業予算案

■記念講演と懇親会

総会に引き続き、午後 3 時から小澤弘江博士の記念講演が予定されています(演題未定)。ご期待ください。また、午後 5 時から館内 2 階の「レストラン・モア」で懇親会(会費 500 円)が開催されます。こちらにもぜひご参加ください。

友の会創立 5 周年記念

館長特別講演会 開催

— 200 名を超える参加者、好評のうちに終わる —

江戸東京博物館友の会の創立 5 周年を記念して、江戸東京博物館竹内誠館長による特別講演会が 3 月 23 日(木)午後 2 時から開催されました。

会は総務部会・藤井文乃さんの司会で開会、岩松精友の会会長、山本市郎同前会長のあいさつのあと、竹内館長



が登壇、「江戸幕政の展開と紀州閩の形成」と題して講演されました。

難しいテーマを時にユーモアを交えながら分かりやすくお話いただき、会場を埋めた 200 名を超すみなさんも十分満足されたようでした。

(講演要旨は次ページ参照)

江戸幕政の展開と紀州閥の形成

江戸東京博物館 竹内 誠 館長



八代将軍吉宗の誕生

江戸幕府の政策の展開を紀州藩を通して見てみましょう。江戸幕府を開いた徳川家康は、自分の直系が絶えた時に備えて御三家を作りました。その筆頭が尾張、次が紀州、その次が水戸です。

正徳2年(1712)10月初め、重徳の6代将軍家宣は、侍講の新井白石を呼び、実子の家継はまだ幼いので、後継に尾張の吉通を選ぶことを相談しますが否定されます。そして結局、家継が7代将軍に決まります。家宣は10月10日、臨終間際に御三家(尾張の吉通、紀州の吉宗、水戸の綱条)を呼んで、幼い家継の補佐を依頼します。

尾張では、正徳3年(1713)7月に吉通が死去し、10月に跡を継いだ五郎太も死去して、吉通の弟、継友が当主になりました。享保元年(1716)7代将軍家継が8歳で死去、本来なら御三家筆頭の継友が将軍の座に一番近いところにいました。しかし、継友は家康の玄孫で、吉宗と綱条は曾孫です。そこで、家康との血の近さから吉宗が選ばれたのです。吉宗は辞退しますが、6代将軍の正室天英院の命により享保元年8月13日に8代将軍の座に着きます。初の御三家からの将軍です。

紀州派による側近政治

吉宗は前代まで政治を主導してきた側用人制度を廃止します。譜代の老中たちは、享保2年(1717)に登用した水野忠之を除き、彼らが死去または引退するまでそのままにしました。吉宗

が公平な人といわれるゆえんです。

しかし、吉宗は尾張や水戸に将軍の座を渡さないために、自分の血の繋がった御三卿を作ります。次男の田安家、4男の一橋家、長男家重の子供の清水家です。

紀州から連れてきた藩士205名を幕臣にして享保の改革を推進するのです。この中で特に目立ったのが有馬氏倫と加納久通を御側御用取次という新しい役目につけたことです。従来幕臣は切らずに形骸化し、実際の政治を有馬と加納に任せたのです。すべてはこの2人を通さなければ物事は進まなくなってしまいます。

御側衆・御小姓・御小納戸衆なども紀州出身者で占められ重要な役割を受け持つことになります。

田沼意次を頂点とする紀州閥の形成

田沼の時代がきます。彼の父親意行は紀州からきて小姓になり、小納戸頭まで出世して600石になり、意次に家督を譲ります。意次は9代将軍家重の小姓から出世し、旗本から大名になります。やがて幕政を握り、最後は57,000石の遠州相良城主です。田沼の幕政を支えたのは20年ほど勘定奉行として活躍した石谷清昌と安藤惟要です。2人は田沼の同期であり紀州の出です。石谷と安藤は田沼時代の政策の基本的な推進者です。海産物、銅、昆布を増産させオランダを通して中国に売り、メキシコから銀を買い入れます。銅の輸出のために長崎に銅座をつくり流通統制を行わせます。尼崎領を

肥沃の地だと見抜き幕府領にしてしまいます。これらの政策は貫徹して失敗はしていません。

田沼時代の前半が終わり、石谷と安藤が退き、紀州閥ではない松本秀持と赤井忠晶が勘定奉行になってからは、天明の飢饉なども重なり、田沼の失政は民衆の反発をかうことになってしまいます。

このように田沼時代にも紀州閥は政策を大きく展開していったのです。

お庭番家筋の活躍

吉宗は享保元年に幕臣化した紀州藩士のうち17名(業込役)を広敷伊賀者に任命します。享保4年(1719)には江戸城天主台下に御庭番御番所が設けられ奥庭の警備を担当します。同時に隠密御用として諸藩の動静、幕府役人の行状、世間の風聞などを吉宗に報告するのです。御庭番が正式な役職になるのは享保11年(1726)からです。この17家は幕末まで諜報活動を行っています。元文以降新しく分家したのが9家で26家になりますが、4家が潰され22家が幕末まで続きます。なお、田沼時代に御庭番の倉地家に鈴木春信の浮世絵で有名な笠森おせんが嫁入りしています。

当初、御庭番はお目見え以下の家筋でした。彼らが有馬や加納に話すのを吉宗が障子の陰で聞いて判断したのです。しかし、活躍して家格が上がり出世した人もいます。文政から天保にかけて水野忠成の貨幣改鑄を手伝った勘定奉行・村垣定行は出世頭で最後は1,200石になります。明楽茂村も同時代で800石、梶野良材は干拓事業(印旛沼、手賀沼など)で活躍します。各地の奉行で活躍した川村修就などが出世しています。出世すれば御庭番の仕事から解放され勘定奉行などいろんな役目に就くのです。ともあれ御庭番は紀州でかためて幕末まで続きました。

【記録】 文：広報部会・岡橋園子
写真：同・佐藤幸彦

第37回江戸東京博物館友の会セミナー(2006/2/25) 日記にみる御家人子弟の勉強生活

井上範之丞の諸稽古を中心に

講師 石山秀和さん

(江戸東京博物館・都市歴史研究室講師)



微力な幕臣・井上家

江戸の人口は約100万人で武士町人半々だといわれていますが、その割には武士である御家人の日常生活を描いた資料はあまり残されていません。幕末の武士がどんな勉強生活をしてきたかを探りましたが、具体的に知ることのできる資料がほとんど残っていません。

今回紹介するのは、下級の御家人子弟である井上範之丞の日記で、井上家の日常生活と範之丞の勉強(稽古事)の一端を垣間見ることができます。

初代貫流左衛門は百姓に近い武士でしたが、砲術のほかには兵法、医術等を学び、医を業としつつ、幕府に仕え、蝦夷地の守衛および地役人の砲術師範を勤め、帰府後大砲鑄造の指導にあたります。

2代目貫流左衛門は父より砲術を、平山子龍より武芸を学び、父に従い蝦夷地へ出張、帰府後普請役となり、橋、堤防工事の現場監督役を勤めました。その後大砲鑄造を命じられ従事中、嘉永5年(1852)永眠しました。

4代目の簾は安政3年(1856)より幕府の普請役になり、堤防・公使館建築、堤防修繕等に従事し、維新後は明治政府でも同様に普請役を勤め、のちに有名な官僚となっていくます。

初代貫流左衛門の遺言状

初代貫流左衛門には面白いことに二つの遺言状がありました。

遺言状の一つは墓石の細かい指示になっていて、大きさだけでなく、磨くのは二面だけでよいと指示しています。つまり余計な金は掛けるなと指示しているわけです。

もう一つは、子供の進路について「なるべくなら武士にさせたいが、砲術か医術かは息子に決めさせろ。遊民(芸人)にはさせるな」と記すなど細かい指示をしています。

井上家は忍城下(現埼玉県行田市)

の出身で自らの才覚をもって砲術により武士になれたので、砲術家を継承させたかったのです。

ちなみに今は、初代貫流左衛門の墓はなく、2代目貫流左衛門の墓は大砲の形の墓になっています。4代目簾は普通のみかげ石の墓です。

範之丞の日記から勉強状況を読む

井上範之丞は初代貫流左衛門の長男である貞流の子供でしたが、貞流が一時廃嫡はいちやくされていました。ただ範之丞が11歳の時、井上家に遊びにきました。その後20歳になり、2代目貫流左衛門の婿養子となりました。

範之丞の日記は弘化2年～5年(1845～1848)に書かれたのが残っています。この時父はまだ現役で、養子縁組はしましたが家督の相続は、はっきりしていませんでした。そんな時の日記ですが、手習い(書道)は、吉城・高橋先生に習い、講釈を聞きに行っていたとあります。その他、砲術鉄砲の練習もしていました。ところが

弘化4年稽古の師匠が亡くなり、練習する所がなくなったことと、本人が病気がちであったため、弘化4年以降はあまり稽古をしていません。手習いに行くだけでなく、手本を先生からもらって来て自宅ですらに勉強をしていたようです。

武士で幕臣である先生に学ぶことにより立身出世の糸口になるようです。さらにこの時代も今のサークルのようなものがありました。つまりネットワークづくりが重要だったことが分かります。よい先生(武士)に習えば立身出世の道が開けるのでした。

人間らしさがあった範之丞

一方、範之丞は勉強ばかりしていたのではなく、よく調べて見るとやはり娯楽がありました。娯楽は「つり」、時々1日ばかりで「つり」に出かけていたと記しています。

また面白い落首をいくつか書写していて範之丞の人間性を垣間見ることができます。範之丞は勉強ばかりでなく、ユーモア性のある、ごく普通の武士であったと分かります。

嘉永元年(1848)6月で日記は終わっていますが、どうしてかを調べてみると範之丞は病弱であったようで、同年8月には亡くなっています。

範之丞の子供・簾が3代目となり明治には政府の官僚になっていきます。範之丞が3代目だったのではないかと悩むところですが、井上家の家督を継いでいなかったし、若くして亡くなってはいますが、状況からみてこれだけの日記があり、私は3代目にすべきだと思っています。

簾は2代目貫流左衛門から3代目へと相続していますが、簾の記したものは範之丞を3代目としています。

いずれにしろ、まだまだ不明なところが多く、これからは調査を進めなければならないと思っています。

【記録】 文：広報部会・岡本静雄
写真(後日撮影)：同・菅沼和男

寺子屋教育と現代

講師 市川寛明さん (江戸東京博物館・学芸員)



企画展の構成とねらい

今回の企画展「江戸の学び—教育爆発の時代—」の構成は、序章：教育爆発の時代、I. 寺子屋に学ぶ、II. 学びを楽しむ文化、III. 学歴社会への胎動、終章：学びの近代化となっています。

この構成による企画展のねらいは、二つあります。一つは、江戸時代に始った「寺子屋教育」から起った学びを楽しむ世界—現代では失った世界—を理解してもらうことであり、二つめは、江戸後期の武家社会に現れ、明治期を通じて大きく展開する学歴社会の萌芽を考えることです。

そして、一般庶民にひろがった学び、すなわち教育が時の変遷とともに変化し、近代社会につながっていることを理解してもらうことを意図しています。

寺子屋の再現模型などから

寺子屋の再現模型は山形県立博物館教育資料館蔵ですが、これを見ると「読み」は先生からの個別指導を受け、「書き」は初めは先生の指導を受けるがそれ以降は自主学习(先輩一年長者から指導を受けることもあった)が基本でした。

寺子屋内での生徒の机の並び方は先生の方を向いていません。ここに寺子屋教育の基本は個別指導と自主学习であることの一つの表れが見られます。現在、残されている幕末に來日した外交官のアンペールの著書の図録や渡辺崋山や歙形蕙斎の絵図による寺子屋での授業風景を見ると、現代では想像もつかないほどの自由な雰囲気です。袴を着て威儀を正している先生もいれば、ゆったりとしている先生もいます。先生の前で読み方の指導を受けている生徒は神妙ですがそれ以外はまったくのバラバラ。外で遊んでい

る子、ネコに悪戯いたづらをしている子などいます。悪戯をして先生からおしかりを受けている生徒もいますが、先生がこのことを本気でとがめている様子は見えません。

寺子屋のカリキュラムは、その子供の性別、年齢、親の職業を考慮して先生が決めていました。子供に応じた「個別教育」であり、先生(師匠)の側も自主性に任されていたことは重要な点です。

寺子屋教育の実態

以下は外竹岩蔵氏の『日本庶民教育研究』によるデータですが、授業法として一斉教授の事例は非常に少なく、関東地方全体で見ると3%以下であり、江戸・下野といったところでは0%でした。

入学年齢ははっきりと決まっていたのではなく、江戸では6歳以下の子供が登山(とざん—寺子屋に入門すること)することはないが12歳位までの事例があります。北関東では1~2歳児の登山が記録されています。これは、寺子屋が保育所的な機能も持っていたことを示すものかもしれません。

在学期間もバラツキが多く、江戸での男の子は5~6年、女の子は6~7年であり、地方では3~6年の範囲が一番多くなっています。全般的に見れば大体今の小学校の在学期間に相当しています。

寺子屋では人格的な師弟関係を結んでいたと考えられますが、これを表わすものが「束脩そしゅう」(入門料)です。束脩の種類は、江戸では銭(お金)とお菓子となっていますが、地方では、米、赤飯、酒といったものもあります。これらは先生と先輩へのあいさつであり、これを納めることによって仲間入りの儀式

を行ない、その一門(?)に加わったことを認識したものと考えられます。また、謝儀(月謝)は銭の割合が多くなりますが、それがすべてではありません。当時の考え方として、束脩と謝儀は指導を受けることの対価ではなく、人格的な師弟関係への儀礼と考えていたと思われます。

現代教育との差違

学ぶという行為が、純粹に能力や技術の習得と考えられていた西欧の社会と異なり、学ぶことを通じて人格が完成されると考えていた日本(江戸時代)では、「学ぶこと」と「道徳」とは分ちがたく結びついていました。寺子屋の師匠は、子供たちが進んで学び、主体的に道徳を実践できるようになるのを我慢強く待っていました。また、当時は身分制度社会であったため、学力・教育が社会的地位や収入に直接結びつくことはなかったのです。それ故、寺子屋での学びには、「ゆとり」があったと考えられます。

しかし、江戸後期になると幕府やそれぞれの藩の運営が難しくなり、それまでの世襲による登用だけでは(特に武家階級では)、有用な人材が求められなくなってきて、試験制度による選抜・登用が出てきました。これが現代の学歴社会につながっているのです。

さらに、明治期になると西欧の文明に遅れた日本が追いつくためには「学ぶことが必要」という認識が一般的になり、効率的な教育が望まれ、一斉教授と成績による選別がこれまでの「ゆとり」を失わせることになってしまったのです。

公平で効率的な教育を実現する一斉教授と、その成績による選別の弊害が著しく表れている現代ですが、失われた寺子屋教育と「学びを楽しむ文化」を再認識することを通して、現代教育のあり方を省みることが大切ではないかと考えます。

【記録】文、写真：広報部会・岡田守弘

「江戸の学び —教育爆発の時代—」展



江戸博にふさわしく江戸時代の教育事情の展示会です。きわめて重要でありながら、教育問題はテーマとしてはやや地味ですが、内容的には見ごたえのある好企画展です。

教育に関してはさまざまな議論があり、中には江戸時代の寺子屋教育へ回帰せよ、という極論まであるそうです。確かに「寺子屋」という言葉には、現代の学校教育と違って、おおらかでほのぼのとした温かさが感じられます。しかしその実態は一般にはあまり

知られていないようです。例えば師匠は子供一人ひとりを個別に指導したとか、体罰はほとんど加えられなかったなど、個性教育やふれあい教育といった、今の議論の原点に近いことも事実です。寺子屋は庶民の教育機関として、実学である読み書き（場合によりソロバン）と生活道徳を身につけるため、あくまでも子供自身が主体的に学習をしたところ。ここで民衆は文字を理解することが出来、これにより江戸時代独特の文化醸成がなされました。

当時の日本の識字率が世界最高レベルであったことは有名です。江戸時代は文書社会といわれますが、政治支配のためのお触れや法令文書だけではありません。庶民同士のごまごました私的事柄から、目安箱への投書や果ては脅迫状まで、文字に記されたさまざまな内容が、まさしく民衆の文字読解力の高さを示しています。読書の楽しみが流行作家やベストセラーを生み、洗練された広告も出現しました。すご六やカルタからの教訓や知識により、生活のなかでの遊びがより豊かなものになりました。さらに大ブームとなった狂歌や俳諧、「和算」や「算額」に見

る高等数学まで、きわめて高度な「学びを楽しむ」精神文化が定着しました。一方支配層である武士の教育機関が藩校です。江戸中期以降には全国で250校以上も開設されています。いわゆる文武両道の人材育成と登用を目的としました。有能な行政官たるべく学力学歴を評価するというものです。「学問吟味」とよばれた試験によって人材を選別する方法です。明治維新以後さらに徹底されました。これが能力主義で選抜された官僚による国家体制です。教育制度にも大きな転換があり、画一的・調教的な学習へ「近代化」しました。寺子屋の個別的・主体的なものは否定され、一斉教育法と試験制度が導入され、厳格な試験により優劣を決める手法が続いています。学びを楽しむ文化もあらかた喪失しました。

今、江戸時代とは比較にならないほど、高学歴で経済的にも恵まれた人々が、うらはらに“低教養”で“非文化的”なのはどうしたことでしょう。江戸の人々のおおらかに豊かな教養と文化を見直したいものです。

【取材】文・写真：広報部会・稲垣武志



江戸博クリップ

都心のオアシス

はじめまして。昨年度から展示係に配属されている丸山です。今年度も引き続きよろしく願いいたします。

先日少々疲れぎみの体を癒しに、平日の仕事帰り誘われるまま都内の某大型温泉施設へいそいそと行ってきました。

いやいや、あまりの充実した環境にびっくりでした。特別に温泉や銭湯好きではない私なのですが、あの快適さには断然はまりそうです。何といっても騒がしいお子さまたちがいない！（18時以降は未成年の入場不可のため）、隅々までとても清潔！（スタッ

フの気配りが行き届いている）、江戸博から20分ほど！（とても重要）、お風呂用品はすべて貸してくれる（手ぶらでOK）、化粧品が自由に使える！（まあ、帰って寝るだけだったので…）などなど至れり尽くせりなのです。温泉とサウナで汗を流した後ふらふらとリクライニングチェアに座り、下ろしたてのタオルケットに包まれTVや雑誌を見ながらだらだら。時間が合わなかったので大画面での映画鑑賞は残念ながらあきらめました。気がつくとうとう4時間は楽しんでいました。お見受けしたところほとん

学芸員 丸山はるか

どは女性ひとりの常連さんたち。よしよし、今度はひとりでも大丈夫…。しかも1日過ごせそう…。

都内には深く掘っていけばいたるところ温泉が出てくる、なんていう不確かなお話を以前聞いたことがありましたが、調べたら結構23区内には温泉施設があるんですね。気持ちすべすべしたお肌に満足しつつ、たまにはこんなささやかなぜいたくもいいものですよ～、とご報告まで。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

見どころいっぱい！板橋宿

＜江戸四宿を歩く 板橋宿＞



江戸四宿巡りも終盤、今回は板橋宿です。うらかな春の陽気に恵まれた絶好の散歩日和。今回参加者は73名、5班に分かれてさあ出発です。「板橋宿」は、中山道の初宿であるとともに川越街道、北国街道、三国街道へも通じていました。今回の出発点、その中山道と環七通りがちょうど交差する、都営地下鉄三田線の「板橋本町駅」です。

■日曜寺と智清寺

まず向かったのは、江戸初期の創建と伝えられる「日曜寺」真言宗の寺院で、享保年間(1716～1736)に田安宗武(8代将軍吉宗の第3子)の帰依を受けました。山門には松平定信の書いた日曜寺の扁額があり、古文書を勉強している人としていない人とは感想が違うのか印象的でした。ところどころで昔の人の文字に巡り合えるのも史跡散策の楽しみのひとつ。ちなみに松平定信は田安宗武の第3子です。

次に向かったのが「智清寺」。室町初期の開創と伝えられるこの寺には板橋上宿の名主板橋家歴代の墓碑や明治の歌人相沢求の墓碑などがあります。門前にある石橋は板橋区登録文化財で、江戸～大正に使用された中用水に架けられたものです。明治5年(1872)には中用水の配水を巡っての

水騒動があったそうです。

■縁切榎から板橋、本陣跡など

旧中山道へ入ってまずは「縁切榎」。いつの頃からか、この木の下を嫁入りの行列が通ると必ず不縁になるという伝説が生まれ、徳川家に降嫁の五十宮、楽宮の行列はここを避けて通り、和宮の折には榎を掻き覆い、その下を通過して板橋本陣に入ったそうです。

そこから中山道を南下しますと、地名の由来である「板橋」、現在ではコンクリートの橋になっています。そこから問屋場、貫目改所の置かれていた「仲宿本陣跡」を通り、本陣飯田家の菩提寺である「文殊院」へ。墓地には宿場時代の遊女の墓があります。

「板橋本陣跡」は現在スーパーになっていますが、江戸時代門構え女閩付きの豪大な屋敷であったそうです。この近くには高野長英ゆかりの地として「水村玄洞宅跡」の案内板が立っています。この水村邸に、逃亡中の高野長英が一時かくまわれていました。少し小道に入り、向かったのは「遍照寺」。宿場時代の馬つなぎ場でした。

■板橋観光協会のご好意

この後板橋区民センターで休憩タイムとなったのですが、趣きのある外観に一同「旅館かと思った」と驚きの声。入館してまたまたびっくり、大きな庚申塔のレプリカをはじめ、板橋区の歴史資料がずらりと展示されていて、休憩どころか熱心に見学する一同。さらに職員の方が、板橋区で作成しているガイドマップをはじめ、歴史、史跡解説のチラシ等をまとめた封筒を配ってくださいました。

観光協会の方がたに感謝しつつ再びコースへ。近藤勇が20日間監禁されていたという「平尾宿脇本陣跡」の黒

い碑を通り「観明寺」へ。参道入口にある庚申塔は板橋区内に現存する最古のもの。

■平尾宿のあれこれ

旧中山道から川越街道が分岐するところを「平尾追分」といい、そこから石神井川方面に下っていくと「東光寺」があります。ここには戦国武将宇喜多秀家の墓があります。境内左手には区民センターにレプリカのあった、高さが2m近くもある庚申塔があり、区の有形文化財に指定されています。

次が「平尾一里塚跡」、徳川家康は関東に封ぜられて以来街道の整備を進め慶長9年(1604)、江戸を中心とした五街道に松や榎を植えた一里塚を築かせました。江戸日本橋を基点とし、一里を三十六町(4km弱)に統一しました。平尾宿の一里塚は日本橋から二里目、ここから旅人は板橋宿に入り、何里歩いた、あと何里だと目印にしました。馬や駕籠に賃料の目安にもなったそうです。

■近藤・土方の墓と予定外の巣鴨へ

最後に向かったのがJR埼京線「板橋駅」東口近くの「近藤勇・土方歳三の墓」。これは新撰組隊士だった永倉新八が、新政府の許可を得て建立したものです。ここで解散、お疲れさまでした。

そして希望者は更にここから巣鴨まで足を延ばし、猿田彦大神、とげぬき地蔵なども見学しつつ自由解散となりました。夕方になって巣鴨の商店街は人出が多く、たいへんにぎわっていました。

【報告】

文、イラスト：総務部会・藤井文乃
写真：広報部会・松原良



サークルだより

会員の自主的サークル・「えど友サークル」の最近の活動状況をご紹介します。

◆江戸・東京を巡る会（「江戸三十六見附を巡る会」改称）

◇2ヵ月に1度の計画で“江戸六阿弥陀仏”および“五色不動”を中心に江戸東京の歴史ある神社、仏閣を巡ることを皆さんと一緒にできればうれしく思います。」とは世話人の磯邊晃さん。

◇第1回は6月17日(土) 12時30分、JR 亀戸駅北口(錦糸町駅寄り)集合、水神森神社、亀戸銭座跡、常光寺(六阿弥陀道)、亀戸天神社、龍眼寺(菘寺)、伊藤左千夫の墓などを巡る予定。

◆落語・講談を楽しむ会

◇2月25日(土)に第16回会合を開催。今回は落語ビデオを鑑賞した。内容は①「おせつ徳三郎(上・下)」(柳家小里ん)②「百年目」(大阪を3代目桂米朝、江戸を6代目三遊亭円生)。参加者は6名。

◇3月15日(水)に第17回の会を開催。今回は特別企画「愛宕山(梅見)とその周辺散策&講談鑑賞」の会。講談「白子屋政談」ゆかりの専光寺、「寛永三馬術」の愛宕山、「赤穂義士本伝」の浅野内匠頭終えんの地、それぞれで講談師の神田織音さんによる講談調の説明を聞いた。昼食後お江戸両国亭で「寛永三馬術」特集の講談を鑑賞した。参加者はサークルメンバー以外の会員を含めて24名。

◆藩史研究会

◇2月24日(金)第8回の会を開催。今回は清水昌紘さんが播磨三日月藩森家について、「森家の系図」「三日月藩誕生」「三日月藩乃井野陣屋」「江戸行人坂森家上屋敷」「森家墓域」など豊富な資料に基づき、ていねいな研究発表を行った。参加者は19名。

◇3月30日(木)第9回の会を開催した。今回は3人の研究発表(「因幡鳥取藩池田家」「加賀金沢前田家」「播磨三日月藩森家」)を受け、各藩主一族が眠る池上本門寺を訪問した。現地で補足説明があり、参加者一同その時代・人生を生きた藩主一族への感慨をあらたにした。参加者は18名。

◆古文書で『八丈実記』を読む会

◇2月9日(木)に第6回の会を行った。参加者は10名。
 ◇2月24日(金)に第7回の会を行った。参加者は9名。
 ◇3月9日(木)に第8回の会を行った。参加者は9名。
 ◇3月24日(金)に第9回の会を行った。参加者は8名。
 ◇この4回で元禄11年(1698)から享保2年(1717)まで読み進んだ。

源内さんの江戸博さんぽ^⑩



※まんが「源内さんの江戸博さんぽ」は今回で終了とさせていただきます。作者の原えつおさん(会員)の2年近くにおよぶ長い間のご協力に感謝いたします。

●新しいサークルの立ち上げを!

現在4つのサークルが独自の活動を展開しています。みなさんもサークルを立ち上げて、同じ趣味や関心を持つ人々との交流を深めてみませんか。サークルをスタートさせるための資料(ガイドライン)の請求、お問い合わせは事務局へ。

申込先 〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
 江戸東京博物館友の会事務局
 Tel.03-3626-9910

『「えど友」に見る5年の歩み』の訂正

次のとおり訂正し、おわびいたします。

2ページ 下から6行目「佐藤幸雄」⇒「佐藤幸彦」

12ページ 表中のNo.16「旧銀座れんが街と周辺の歴史探訪」
 ⇒「旧銀座れんが街と周辺の史跡探訪」

同 同No.17「北関東の小江戸・栃木市の蔵造りの街探訪」
 ⇒「北関東の小江戸・栃木市の蔵造り街探訪」

18ページ 参考4. No.7「両国第一ほてる・さくら」⇒「両国第一ホテル・さくら」

一之橋通りを下る(2)

藤原平八郎

隅田川に新大橋が架かったのは、元禄6年(1693)のことであった。永代橋が架かったのは、それから5年後の同11年(1698)のこと。隅田川に新大橋が架かるまでは、江戸市中と深川の往来は、主として渡し舟が利用されていたと物の本にはある。けど僕は、必ずしもそうとばかりはいえないような気がしている。すでに延宝年間(1673～1680)には隅田川に両国橋があった。「両国橋の旧名を大橋という。故に新しく架けられた橋を新大橋という」と、『江戸名所図会』に出ている。隅田川に新大橋が架かるまでは江戸市中と深川地区の往来に、渡し舟を利用するのが便利であったことは否めない。だからといって両国橋の利用価値が、無かったというわけではなかった。

松尾芭蕉は延宝8年(1680)の10月22日に、日本橋から深川へ移住してきた。移住の理由は10月21日未明に新小田原町で発生した、火事によるものではないかという考察もある。いずれにしても急なことであった。門弟は誰も移住していない。芭蕉自身は隠棲する決心をしていたようであるから、門弟たちの往来が多少不便になったとしても、頓着はしていなかったのだろうが、なかには困った者もいたのではなかったろうか。

芭蕉の門弟の一人に宝井其角という若者がいた。芭蕉の死後江戸俳句界の中心人物として、活躍することになる逸材だが、その頃は入門してまだ数年の、弱冠20歳の新進気鋭の若者だった。神田お玉が池に住んでいた。其角は天和3年(1683)彼自身の処女出版であり、蕉門の最初の俳書である

『虚栗』という本を、芭蕉の指導によって刊行している。其角23歳のときのことである。

この俳書を刊行するに際して、芭蕉の指導を受けるために其角は、延宝8年末から天和3年の足掛け4年間、深川芭蕉庵に足繁く通っていったものと思われる。このとき其角は渡し舟を利用していない。間違いなく両国橋を渡ったと思う。橋を渡って東詰めの隅田川にいちばん近い角を右にまがり、一ツ橋を渡って一之橋通りを下って行ったに違いないと思われるのである。

もっとも芭蕉は天和2年(1682)12月28日、本郷駒込の大円寺から出火した俗に言う「八百屋お七の火事」によって、深川芭蕉庵を焼け出された。翌天和3年のはじめ頃まで、甲斐国の谷村などで流寓生活を送っていたようだから、其角は3年間まるまる、深川芭蕉庵に通いつめていたわけではなかった。

過日、僕は神田お玉が池があったといわれている、中央区岩本町の辺りを出発点にして、其角が通ったと思われる道程を散策してきた。柳橋から両国橋の西詰めにいたる、神田川の岸に筋^いつてある灯のともっていない、幾艘かの屋形船を眺めて、其角をしのんできたのであった。

多摩について

桐井聰男

東京都下の三多摩というと、西多摩、南多摩、北多摩であって、どうしたものか東多摩という地名がない。どうしてであろうと、思っただけだけれど、日常の煩雑に追われ、これといった勉強もしていなかった。東京に生まれ、そのほとんどを東京で生活してきた自分としては、少し整理を試みようと思った。いわば灯台の下の暗さに少し光をあててみようとしたが、これもまことに複雑なものであって、全く進まなかった。

まず方向性の地名から、東西南北と

いう四隅があって、大方の人々は東をその初めに指している。その東が現在消滅しているのはなぜなのであるか。当初からなかったのではないし、失うべきものでもないはずである。

次に、東にあたる地域がなにかの理由によって併合されたというのなら、その姿はどうであったのか。本来、武蔵野の開拓は、西郊に進むべき歴史があるのに、都心に向かってきたことは考えられない。

利便性からみても、甲武鉄道(現在のJR中央線)が明治22年(1889)4月に新宿・立川間の開通をみるが、その10年前に、廃藩置県から発生した多くの問題が生じていた。少しその足跡をみても、明治3年(1871)7月14日の廃藩置県によって、多摩郡は、神奈川・葦山・品川・前橋・岩槻・竜ヶ崎・西端・彦根県の所属となっている。もっとも外国人遊歩地区(神奈川10里四方)は神奈川府(1868.8～9)のものとして、多摩川・秋川以南の地を武蔵知事・葦山県の合意の上、神奈川府(神奈川府と称せられていた)へ移管、多摩郡の全部は明治3年(1871)から翌年にかけて、順次神奈川府に編入された。ただ中野村辺りは、東京府の荏原・豊島両郡のとりあいになり、明治4年(1872)の9月には東京府への管轄替えとなっている。

明治10年(1878)郡区町村編制法に基づいて、多摩郡は4郡に分割され、東京府下にあった地域は東多摩郡、神奈川県管轄分は西・北・南多摩郡となった。郡制公布で郡の統廃合は当然問題化し、いわゆる東部の田無(西東京市)・三鷹・東村山・小平は東多摩郡(中野・杉並区)との合併、府中・砂川・大神あたりは北多摩の独立を主張した。

このようにすでに東多摩郡は存在し、一部は中野・杉並に合併したけれど、直ちに平和裡に進んだものではなく、忘れることのできないものとして、多摩川支流でコレラ患者の汚物の洗浄

事件があり、東京のチェックも神奈川に及ぼすわけに行かず、一つの地域化のために合併を認めることの必要性が持ち上がってきた。その他、多摩川上流での水源涵養、それ以前に神田・多摩川上水の管理問題などがあった。それに伴う、集団の結束化(政党の誕生)、数多くの暴力化などを起こしながらも明治26年(1893)3月4日、境域変更の法律が公布された。わずか6カ条であるが、第一条をみると、「神奈川県下武蔵国西多摩郡、北多摩郡、南多摩郡ヲ東京府ニ移ス」とある。第六条に「此ノ法律ハ明治二十六年四月一日ヨリ施行ス」そして内閣総理大臣伊藤博文、内務大臣井上馨による付記に「多摩の沿革」がある。少し長い文章であるが、それによると、

「多摩郡ハ武蔵ノ西南ニ当リ、中古多摩川ヲ画シテ之ヲ東西ノ二郡ニ分ツ。徳川氏ノ時復タ合シテ一郡トナシ、多クハ代官ヲ以テ之ヲ支配ス。当時一郡ノ市邑村落四百六七十ナリト云フ。明治元年韮山県ヲ置キ、全郡其所轄ニ属シ、四年韮山県ヲ廃スルニ至リ、其所轄ヲ神奈川県に属ス。五年神奈川ノ所轄中野外三十一ヶ村ヲ割テ東京府ニ移ス。十一年郡区町村編制ノ際、東京府ニ移ルモノヲ東多摩郡トナシ、其他神奈川県ニ在ルモノヲ分テ西南北ノ三

『東京の地名由来辞典』

竹内 誠 編

「本書では東京23区で現在使われている町名を中心に、坂や公園名などに残る江戸時代からの地名も含め約1700の地名について、由来、



地名として使われていた時期と場所の比定、その変遷、及び地名の歴史的事蹟を解説した」とパンフレットにあります。

思えば、幼い頃から慣れ親しんだ地名が東京の町から次々と消えていきました。東京オリンピックを2年後に控えた昭和37年(1962)に「住居表示に関する法律」が施行され、合理化の名のもとに機械的で無味乾燥な町名が登

場氾濫しました。

とはいっても広い東京には江戸の人々の生活をうかがい知る多くの地名もまだまだ残っているそうです。本書から一例をご紹介します。

お花茶屋(おはなじゃや・葛飾区)

「お花茶屋の地名は、享保年間(1716～35)、徳川八代将軍吉宗が葛西筋で鷹狩りを行っていた時、にわか腹痛を起こし、付近の新左衛門茶屋と称する店で娘お花の手厚い看護によって病気が全快したので、将軍から「お花茶屋」の名稱を賜った…以下略」。

江戸東京博物館の竹内誠館長が編者となり、各区の資料館・歴史館などの若手研究者ら30人余が分担して2年間かけて執筆された力作です。きっと江戸が身近にあることに気付くと思います。

出版社「東京堂出版」、定価(本体3,200円+税)。四六版、472ページ。

郡トナス。」以下省略を交えるが、「多摩ノ名ハ、太婆ト訓シ、大丹波・小丹波ノ両村アルヲ以テ太婆ト唱ベント云フ。其名始メテ続日本紀天長十年及承和十一年ノ条ニ見ユ……」

このようにみると東多摩郡という郡名はすでに成立していたが、それが現在のどの辺りに該当するのかという問題が生じる。杉並区・中野区が含まれていることは判るが、変更が多くて確定することはできない。丹波は現在山梨県に属している。地名辞典によると

多摩とは「魂」のことで、古代の多摩国は大国魂命が治めたところに由来するとあり、そこを流れる多摩川も魂川、すなわち霊力を持った川の意で、後に玉川とも記され、川がきれい玉石を敷きつめたような美しい川、との説も生まれた。多摩の地名はきわめて古く、萬葉集(巻20)にも、「赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山かしゆかやらむ」とある。

参考文献:『多摩移管百年展の記録』

◆役員会

2月9日(木) 18時から開催。創立5周年記念行事の竹内館長の記念講演の演題が決定。講演会のパブリシティー先を決定した。会計より会費足時に策定した収入・支出の項目には現在不要・不適切なものがあるため、実情に合わせて改訂したいとの提案があった。出席11名。

3月9日(木) 18時から開催。5周年記念行事の一般参加者の応募状況が思わしくないため、急ぎょ館内掲示などの対応を決定した。また、総会資料の作成手順・日程などについても検討した。出席11名。

会議・会合日誌

2006/2～2006/3

◆事業部会

2月1日(木) 18時から開催。今後の部会の運営体制について協議した。平成18年度の事業計画案のタキ台が提案され、意見交換を行った。出席14名。

3月2日(木) 18時から開催。当面の4月、5月の行事予定と担当者について確認した。出席11名。

◆広報部会

2月15日(水) 16時から開催。『えど友』第29号の反省、同第30号

の内容、および次年度の編集内容について引続き検討した。出席8名。
3月15日(水) 16時から開催。『えど友』第31号の内容と来年度計画を引続き検討した。出席9名。

◆総務部会

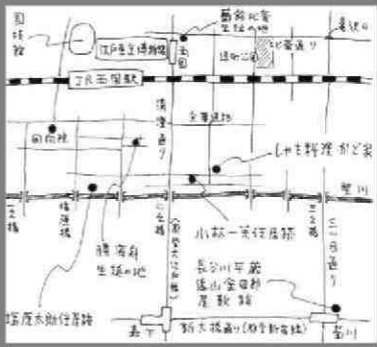
2月26日(木) 11時から開催。『えど友』第30号、『えど友』に見る5年の歩み』などの発送作業を行ったあと、今後の部会運営・サークル活動のあり方などを話し合った。出席7名。

3月29日(水) 13時から開催。「江戸東京博物館NEWS」などを発送した。出席10名。

ちょっと寄ってみませんか?

江戸博界隈 ⑨

【史跡巡り】と【しゃも料理・かど家】



史跡巡り

●勝海舟生誕の地 (両国 4-25-3)

文政6年(1823)、海舟はここにあった父小吉の実家男谷家で生まれ、7歳まで育ちました。少年時代は日本所入江町(緑4-24)で過ごし、浅草新堀端の島田道場で剣術を習ったり、向島の弘福寺で禅の修行をしています。小吉は高100俵無役の御家人で、生活は苦しかったようです。23歳のとき本格的に蘭学を学ぶため、赤坂に転居するまで本所で暮らした海舟です。明治32年(1899)77歳で病没。

江戸博から徒歩12分。両国公園に碑。

●塩原太助住居跡 (両国 3-4-5)

太助は、寛保3年(1743)群馬県利根郡新治村の生まれで実在の人物。19歳で江戸に出て炭屋に奉公、独立して一代で財をなします。「本所には過ぎたるものが2つあり。津軽大名と炭屋塩原」とうたわれました。晩年には多額の私財を公益事業に投じ、立志伝が明治の初め、現在の亀沢3丁目に住んでいたはなし家三遊亭円朝により人情話に仕立てられました。太助にちなみ名づけられた堅川にかかる塩原橋(手前に碑)左側一帯が炭屋の跡です。文化13年(1816)病没。



▲堅川にかかる塩原橋

海舟生誕地から徒歩6分。

●小林一茶住居跡 (緑 1-3)

俳人一茶は宝暦13年(1763)旧柏原宿(長野県信濃町)の生まれ。15歳のとき江戸へ出て以来、29年に及ぶ江戸生活の中で、文化元年(1804)42歳のときから4年ほど住んだこの地の借家がいちばん安定した住まいでした。しかし、この家は祖母の法事で帰郷、200余日の旅の間に他人に貸されてしまいます。その後は故郷に定住するまで、再び弟子や後援者の家を泊まり歩く漂泊の身となりました。文政10年(1827)65歳で病没。

塩原橋から徒歩10分。道路端に碑。

●葛飾北斎生誕の地 (亀沢町 1-7)

富嶽三十六景など風景画にも多くの傑作を残した葛飾北斎は、宝暦10年(1760)ここ(旧本所南割下水)に生まれました。今はこの通りを北斎通りと名づけ、両側の街路灯44本の柱に88点の版画が展示されています。姓の葛飾は生まれ育った地が下総国葛飾であったことからつけたもの。北斎は本所界隈を中心に93回転居しています。嘉永2年(1849)90歳、浅草で没。

一茶旧居跡から徒歩8分、江戸博から徒歩2分。道路端に碑。

●長谷川平蔵・遠山金四郎屋敷跡

(菊川 3-16-13)

史実の火付盗賊改め長谷川平蔵(鬼平)は19歳のとき父の屋敷替えで築地からこの地に移転。『鬼平犯科帳』では鬼平の住まいは堅川の二之橋付近ですが、池波正太郎の思い違いによるものらしい。敷地は1200坪(3967㎡)余でした。長谷川家の家禄は400石ですが、職禄がつき1500石。寛政7年(1795)50歳で退役、その年に病没しました。

約50年後、鬼平の孫の代に屋敷替えとなり、遠山の金さんこと、遠山金四郎の下屋敷になりました。金四郎は寛政5年(1793)の生まれ。遠山家の家禄は500石ですが、町奉行の職禄がついて3000石です。彼は若い頃、

家を出て町屋で暮らした経験があり、庶民に通じた名奉行として有名です。安政2年(1855)62歳で病没。

地下鉄菊川駅A3出口から徒歩1分。新大橋通りの丸山歯科医院前に碑。

しゃも料理・かど家

『鬼平犯科帳』に出てくるしゃも鍋屋「五鉄」のモデルともいわれる店。文久2年(1862)の創業です。うわさの根拠は、池田弥三郎と一緒に池波正太郎が何度かこの店を訪れていること、小説の中では長谷川平蔵の住まいがこの店から近い二之橋あたりになっているからでしょう。格子戸のある2階家は玄関に盛り塩が置かれ、引き戸。靴を脱いで上がるので、初めての客にはちょっと入りにくいですが、声をかければすぐ人が出てきて案内してくれます。



鳥一筋の専門店、板長は15歳からこの店に来て50数年、伝統の味を守っています。しかし時代により客の好みも変わり、かむほどに味の出るしゃもも、今の客には硬いといわれ、近頃はしゃもと地鳥を掛け合わせたものを使用しています。とはいえ一口食べれば、プロイラーに慣らされた舌にも「これぞ鳥の味」とうまみが分かります。

看板メニューは八丁みそを丹念に練り上げた秘伝のたれが自慢のしゃも鍋です。八丁みそを使ったのは初代が岡崎の出身だったため。ほかに鳥スープに鳥のたたきを入れ、土佐じょうゆに大根おろしで食べるスープ煮、ポン酢で食べる水たぎ、鳥を使った一品料理もあります。鍋定食は鳥の刺身や和え物、酒蒸しの小鉢がついて6500円、ランチはきじ焼き弁当、親子丼が1000円(値段は税抜き)。

墨田区緑 1-6-13 江戸博から徒歩12分。
電話 03-3631-5007 営業時間 12~14時、
17~22時 定休日 日曜、祝日

【取材】 文：広報部会・大野晴美
地図・写真：同・松原良

催事案内

古文書講座

今年度も3講座制で6月から開講

平成18年度の古文書講座は昨年度同様「入門編」「初級編(1)」「初級編(2)」の3講座となります。受講方法もまた前年度同様です。

「初級編(1)」と「初級編(2)」はほぼ同レベルですので、初級編への参加は1講座のみとさせていただきます。「初級編(1)」「初級編(2)」のどちらかを選び受講してください。

「入門編」は「初級編」の(1)か(2)のどちらかを受講する方、どちらも受講しない方のいずれも応募することができます。

★いままで継続して受講されている方も、今回は締切日までに希望講座を明記して応募をお願いします。

★初級編(2)の第3回(9月16日)の会場のみ江戸東京博物館・事務棟2階会議室となっていますのでご注意ください。

◆入門編 第1期

- ・開催日時：第1回 6月7日(水) 14:00～16:00
第2回 7月5日(水) 14:00～16:00
第3回 9月6日(水) 14:00～16:00

- ・会場：いずれも江戸東京博物館・1階会議室
- ・講師：小松賢司さん(学習院大学大学院史学専攻)
- ・定員：80人
- ・参加費：全3回 1,500円(初回当日払い)
- ・申込締切：5月16日(火)必着

◆初級編(1)第1期

- ・開催日時：第1回 6月21日(水) 14:00～16:00
第2回 7月19日(水) 14:00～16:00
第3回 9月20日(水) 14:00～16:00

- ・会場：いずれも江戸東京博物館・1階会議室
- ・講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)
- ・定員：80人
- ・参加費：全3回 1,500円(初回当日払い)
- ・申込締切：6月6日(火)必着

◆初級編(2)第1期

- ・開催日時：第1回 6月17日(土) 14:00～16:00
第2回 7月15日(土) 14:00～16:00
第3回 9月16日(土) 14:00～16:00

- ・会場：第1回と第2回は江戸東京博物館・1階会議室、第3回は江戸東京博物館・事務棟2階会議室
- ・講師：小宮山敏和さん(徳川林政史研究所)
- ・定員：50人
- ・参加費：全3回 1,500円(初回当日払い)
- ・申込締切：5月30日(火)必着

【企画担当責任者】谷岡文彦(事業部会)

友の会セミナー

第40回「江戸時代の旅事情と旅人たち」

講師 高橋千劔破さん

◆江戸時代、日本は世界でも屈指の旅行が盛んな国でした。職務として大名や武士が旅をしたのはいうまでもなく、富豪商人だけでなく町人・文人墨客・行脚僧・旅芸人から村娘と、あらゆる階級の人たちが旅を楽しんでいました。では、交通事情がよいとは言えないこの時代に、なぜ大勢の人たちが旅をしたと思ったのか、どうしてできたのか、旅の携行品は？費用は？旅の服装は？そんな疑問に答えながら、当時の有名人、無名人のエピソードを交えてお話をさせていただきます。

○講師略歴：たかはし・ちはや

日本ペンクラブ常務理事。日本文芸家協会会員。大衆文学研究会幹事長。歴史・文芸評論家。新人物往来社に30年間勤務し、『歴史読本』編集長、同社編集局長を経て96年退社。以後、文筆家として活躍中。著書に『赤穂浪士』『花鳥風月の日本史』『江戸の旅人』『名山の日本史』『日本人物史』他多数。

※講師の著書をお持ちの方で講師のサインを希望される方はその本をご持参ください。

・開催日：6月24日(土) 14:00～15:30

・申込締切：6月13日(火)必着

・会場：江戸東京博物館・1階会議室

・定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)

・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

今後の予定(詳細は逐次ご案内、変更する場合があります)

●「鹿鳴館の女たち」

講師 近藤富枝さん(作家)

・開催予定日：7月22日(土)

●「落語の起源と寄席のはじまり」

講師 山本 進さん(芸能史研究者)

・開催予定日：8月5日(土)

●「映像史の視点・映画に見る東京」

講師 深川英雄さん(駒沢女子大学教授)

・開催予定日：9月23日(土・祝)

●「江戸の最高学府一昌平黌とそこに学んだ人々」

講師 村山吉廣さん(早稲田大学名誉教授)

・開催予定日：10月28日(土)

●「江戸の狂歌ブームを探访する」

講師 川口順啓さん(金沢学院大学客員教授)

・開催予定日：11月25日(土)



見学会

「江戸四宿を歩く 内藤新宿」

◆お楽しみいただいております「江戸四宿巡り」ですが、今回は内藤新宿です。甲州道は元来軍事的重要性が特徴であり、また「四谷新宿馬のくそ」と俗に言われたように、人の往来や物資の運搬の盛んなところ、その第一の宿・内藤新宿は宿場とはいえ遊興地的色合いの強いところだったようです。今回は大木戸跡、玉川上水碑、太宗寺を中心としたいわゆる旧内藤新宿界隈から四谷、左門町周辺に足を伸ばしたいと思っています。

- ・開催日：6月10日(土) 12時45分集合
- ・集合場所：東京メトロ丸の内線・四谷駅
- ・申込締切：5月30日(火)必着
- ・定員：80名 同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- ・参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】 玉木達二(事業部会)

お申込方法

◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。

なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。

- ◆締切：各催事の案内をご覧ください。
- ◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
- ◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 江戸東京博物館友の会事務局

*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更のご連絡などはなるべく水曜日か金曜日にお問い合わせいたします。

*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。



会員優待のお知らせ

好評開催中!

●特別展 ヴェルサイユ宮殿美術館 ナポレオンとヴェルサイユ展

会期 2006年4月8日(土)～6月18日(日)

休館日：毎週月曜日、ただし5月1日、5月8日、5月15日の各月曜日は開館

図録 定価2,300円、会員割引2,070円(1割引)

会員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円

同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

次回予告

●特別展 驚異の地下帝国 始皇帝と彩色兵馬俑展 ～司馬遷「史記の世界」～

会期 2006年8月1日(火)～10月9日(月・祝)

休館日：毎週月曜日、ただし9月11日、9月18日の各月曜日は開館

観覧料、図録定価(会員割引も)未定

※呼称が変わりました。

従来「企画展」と称していた1階企画展示室での展示は「特別展」に、同じく「第2企画展」と称していた5階第2企画展示室での展示は「企画展」に、それぞれ平成18年度から変わりました。

企画展ご案内

残り会期わずかです
お見逃しなく!

●「昭和モダニズムとバウハウス ～建築家土浦亀城を中心に～」

開催期間 2006年3月14日(火)～5月7日(日)

会場 5階常設展示室内 第2企画展示室

次回予告

●発掘された日本列島 2006 新発見考古速報展

開催期間 2006年6月20日(火)～7月23日(日)

会場 5階常設展示室内 第2企画展示室

江戸東京博物館友の会 会報<えど友>第31号
平成18年5月1日発行
奇数月刊。次号は平成18年7月1日発行予定

編集・制作：友の会広報部会

〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910

発行人兼編集長：松原 良(副会長) 副編集長：菅沼和男

編集人：岡橋園子、佐藤幸彦、小柳英二郎、大野晴美、

斎藤美香子、稲垣武志、岡田守弘、高澤美恵子、岡本静雄